

フランス語の冠詞の意味

町 田 健

0. 序論

冠詞は、名詞句の指示するもの⁽¹⁾が、「定」であるのか、それとも「不定」であるのかを表示する形式であり、定を表示する形式を「定冠詞」、不定を表示する形式を「不定冠詞」と呼ぶ。フランス語の伝統的な文法では、定冠詞、不定冠詞の他に、「部分冠詞」という範疇を設定するのが普通であるが、いわゆる部分冠詞は、不加算名詞が不定であることを表示する形式であると考えて差し支えないから、部分冠詞は不定冠詞の下位範疇であると見なすことができる。⁽²⁾

冠詞の意味を論ずる場合に問題となるのは、当然のことながら、定・不定で表示される性質が何であるかということである。一般的に使用されている文法書では、定が「特定の対象」あるいは「限定された対象」を表示し、不定が「不特定の対象」「限定されていない対象」を表示すると規定されている (Grevisse 1986, 朝倉 1955 など)。このような記述は、定・不定を特定・不特定、限定・非限定という別の表現に置き換えただけなので、そもそも、ある対象が特定であるとか限定されているとは、どのような性質を意味するのかを明らかにしない限り、定・不定を適切に記述したことにはならない。

朝倉 (1955) には、定に「唯一物性」があるという趣旨の記述があるが、例えば次の文を見てみよう。

(1) J'ai rencontré une fille.

私はある女の子に会った。

この文は、話し手がある過去の時点において、filleによって指示される人間に会ったという意味を表している。filleは単数形だから、その人

間の個数は1である。ある主体がある1つの時点において会うことのできる人間は、それが1人であれば、人間の集合の中で「唯一の」ものであることは確かであるにもかかわらず、(1)ではuneという不定冠詞が用いられている。すなわち、ある名詞句は、それが表示する集合の中の唯一のものであろうと、不定であることができるのである。このことから、唯一性を、定である性質を決定する本質的な要因であると考えすることは不適切であることが分かる。

論理学の観点から定冠詞を論じたものとして Russel (1905) がある。Russel によれば、定冠詞を含む文の意味は、次のような式によって表示される。

$$(2) \exists c (\forall x (\phi x \text{ iff } x=c) \& f(c))$$

この式を用いれば、例えば、次の(3)は、(4)のように表示されることになる(ただし、loc は locuteur 〈話し手〉を、P はある命題が真である時点が発話時点よりも前であることを表す)。

(3) J'ai rencontré la fille.

$$(4) \exists c (\forall x (\text{fille}(x) \text{ iff } x=c) \& P(\text{rencontrer}(\text{loc}, c)))$$

一方、(1)の意味表示は、(5)のようになる。

$$(5) \exists x (\text{fille}(x) \& P(\text{rencontrer}(\text{loc}, x)))$$

Russel のこの記述は、Montague の形式意味論にも踏襲されているのであるが、結局は、定冠詞付きの名詞句について、これによって表示される対象 c が、「唯一の」そして他の fille とは異なる fille であることを主張していることに他ならない (Galmiche 1989)。この点では、定である

性質と唯一性を同一視する伝統的な知見と変わりがないことになる。実際、une fille を含む文の意味表示としての (5) は、過去のある時点において発話者が会った fille が、「少なくとも」1人いることを表わしており、1人より多くても真になりうる。ところが、(1) が実際に表示しているのは、そのような fille が「1人だけいた」という事態であり、したがって、(5) のような式は、(1) の意味表示としては正確ではないと見なさなければならない。

要するに問題は、(1) の une fille と (5) の la fille はともに、fille の集合の中の唯一の個体を指すにもかかわらず、前者の名詞句が不定で、後者の名詞句が定であるということは、一体どのような事態を意味するのかということなのである。

この問題を解決するための方策として有効であるかもしれないのは、「聞き手」によって名詞句の指示対象が特定化 (= 同定) できる、すなわち聞き手が、名詞句の指示対象を唯一物として認定できる場合に、その名詞句を定と見なすというものである。確かに、(1) の une fille は、話し手にとっては唯一の fille であるにしても、聞き手がその対象がどれかを認定することはできないのに対し、(3) の la fille が使用されるためには、すでにこの文が使用される状況中に唯一の fille が存在していることが要請される。そして、la fille はこの個体と同一の個体を指示するのであるから、聞き手はこの名詞句の指示対象を認定することが可能である。

聞き手による「同定可能性」を定の根拠とするこの説 (Charadeau 1992) は、この限りでは魅力的であるにしても、次の (6) における定冠詞の使用を説明することはできない。

(6) Le train est arrivé à la gare centrale d'une ville.

その列車はある町の中央駅に着いた。

gare centrale 〈中央駅〉は1つの町には1つしかないことは確かだが、聞き手が ville を同定できない以上、この gare centrale も同定することが不可能なはずである。にもかかわらずこの名詞句は定なのであって、定冠詞を不定冠詞に置き換えた(7)は、不適格な文となる。

(7) * Le train est arrivé à une gare centrale d'une ville.

しかしながら、文の使用される「状況」をも含めて名詞句の意味を考察することにより、名詞句の定・不定に関わる現象の一部でも説明することができたのであるから、状況の考慮は、この問題の解決にとって一助となる可能性はある。

文の使用される状況を文の意味の理解に関わらせたものとして、一川(1988)において主張されている、定である名詞句がある範囲のもの「全部」を、不定である名詞句がある範囲のもの「一部」を指示するという説がある。Guillaume (1975: 59)における、定冠詞の機能についての、次のような定義も、同様の背景をもつものと考えられる。⁽³⁾

l'article *le* exprime seulement qu'un nom est répandu sur tout un champ de vision...

この説に従うならば、(3) が使用される場面では、すでに状況によって1個の fille が与えられており、la fille はその全部を指示することになる。一方、(1) が使用される場面では、状況には特別な個体は与えられていないから、与えられているのは fille であるものの集合全体というこ

とになり、une filleはその集合に属する1個の要素を指すのだから、確かにその「一部」を指示しているのである。

この考え方であれば、いわゆる「総称的」な意味をもつ定冠詞付き名詞句の意味をも説明することができる。

(8) La fille est un être mystérieux.

女の子は不思議な存在だ。

特定の個体が与えられていない状況であれば、その状況中に与えられているのは「女の子の集合全体」であると考えることができるから、名詞句 la filleはその集合の全部を指示することになり、この文中の la fille の総称的意味に適合する。

ただ、この説の難点は、不定名詞句の「任意性」が明確な形で指摘されていないことである。(1)の une fille は、fille の指示対象の一部ではあるが、任意の一部である。もし任意でなければ、一部であったとしても定名詞句になるから、la fille となっているはずである。不定名詞句に任意性があるからこそ、(8)の la fille を une fille に置き換えても、同じように総称的な意味を表すことができるのではないだろうか。

(9) Une fille est un être mystérieux.

さらにまた、名詞句の意味を厳密に規定しておかなければ、(10)における名詞句が定であることを、説得力のある形で説明することはできない。

(10) On voit la flèche d'une cathédrale.

教会の尖塔が見える。

flèche は、尖塔の集合のうちの一部ではあるが、d'une cathédrale と

いう前置詞句による限定があることにより定になっていると考えられる。flèche という名詞の意味と前置詞句の意味が、どのような形で結合してこの名詞句全体の意味を決定しているのかを明かにして初めて、この名詞句の定である性質を合理的に説明することができる。(4)

以上の考察から、名詞句の定・不定を適切に論じるためには、状況、名詞句の意味、そして任意性の問題を考慮する必要があることが明らかになったと思われる。本稿では、これらの観点を中心に冠詞の意味の厳密な規定を行うことを試みる。

1. 名詞の意味

形態素の意味は、一般に、それが指示する対象の集合としてとらえられる(町田 1994)。形態素が属する統語範疇が名詞であれば、それは個体の集合もしくは事態の集合である。homme 〈人〉, chien 〈犬〉, livre 〈本〉のような具象名詞の指示対象が個体の集合であり, parole 〈発言〉, mouvement 〈運動〉, guerre 〈戦争〉のような抽象名詞ならば、事態の集合を指示する。

フランス語においては、英語やドイツ語におけると同様に、「可算名詞」と「不可算名詞」の区別があるが、上にあげた homme などはすべて可算名詞である。不可算名詞についても、具象名詞と抽象名詞の区別が存在する。不可算名詞中の具象名詞としては、eau 〈水〉, beurre 〈バター〉, pain 〈パン〉などがあり、これらは、可算名詞の場合と異なって、境界が不明な個体の集合を指示するものとしてとらえられる。可算名詞 homme によって指示される集合に属する要素は、他の要素との境界がどの話者にとっても明らかであるが、eau によって指示される集合に属する要素ならば、それが具体物である容器中に存在している場合に限り、境界

が明らかであるのであって、*eau* の通常の存在様態は、その境界がすべての話者にとって同一であるほど自明であるということは全くない。(5)

一方、不可算名詞中の抽象名詞としては、*philosophie* 〈哲学〉、*paix* 〈平和〉、*courage* 〈勇气〉⁽⁶⁾ などがあげられる。これらの名詞が事態の集合を指示することは、*parole* などの場合と同様である。*parole* と *philosophie* の違いは、前者ならばその集合に属する事態が明確であるのに対し、後者については、どの事態がその集合に属するかが、話者によって判断が異なる場合が生じうることである。

parole に属する事態は、「a が X と言う」「b が Y と言う」……という形をとって、「言う」(*dire*) という行為が何を指すかについて、話者によって判断が異なるということはないし、X や Y が指示する事態に関する制限はない。ところが、*philosophie* に属する事態は、「a が X と考える」「b が Y と考える」……という形をとる。「考える」(*penser, croire*) という行為が何を指すかについては、話者の判断は概ね一致すると考えられるが、考える対象である X や Y については、話者の判断が必ずしも一致するとは限らない。

例えば、「*p pense sur l'existence*」〈p が存在について考える〉ならば、これを *philosophie* に属する要素と見なすことに問題はないが、「*q pense que Dieu est absolu*」〈q が神は絶対であると考える〉という事態については、これを *philosophie* に属する要素と見なす話者もいれば、そうではない話者もいるだろう。

このように、不可算名詞中の抽象名詞と言われるものは、それに属する要素である事態が、具象名詞中の抽象名詞に比して不分明である程度が高いという性質もっている。したがって、その全体集合が何であるかを決定することが本質的に不可能であるということになる。

ただし、可算・不可算の対立は、それが指示する集合が不定である場合に、不定冠詞を選択するか部分冠詞を選択するかに関与するのみであって、定・不定という性質の決定に関与するのではない。またフランス語では、café〈コーヒー〉や poisson〈魚〉が、状況によって可算・不可算のいずれでもありうるということはよく知られている通りである。本稿は名詞の定・不定を論ずることを目的とするのであるから、名詞の可算・不可算については、特に必要な場合を除いては、考察の対象としない。

2. 名詞の単数形と複数形

フランス語の名詞の複数形態素は {-s} である。⁽⁷⁾ 単数と複数の意味が、それぞれ形態素によって表示されるという前提に立つならば、フランス語の単数形態素は、音形をもたない {-∅} であるということになる。つまり、例えば homme といういわゆる単数形は、形態論的には、homme という単数形態素を伴わない形と、homme-∅ という単数形態素を伴った形の両方に対応する。

意味を集合と見なす立場からは、homme にこのような二面性を与えることが是非とも必要になる。なぜならば、homme の意味は、homme であるものの集合全体によって表示されるのであり、単数や複数の意味は、後述するように、その集合の部分集合を指示することによって表示されることになるからである。⁽⁸⁾ homme と homme-∅ という記法はわずらわしいので、以下では、homme であるものの全体集合を HOMME で、それに属する個数 1 の要素を homme で表すことにする。

HOMME が全体集合ならば、単数形 homme はその全体集合に属する個数 1 の要素である。一方複数形 hommes は、全体集合の部分集合で、個数 2 以上のもの（言い換えれば、全体集合のべき集合の要素で、個数 2

以上のもの)に対応する。(9) 一般的には、名詞の単数・複数形態素の意味は、次のように規定される。

単数形態素：全体集合に属する任意の部分集合で、個数1であるものの集合

複数形態素：全体集合に属する任意の部分集合で、個数2以上であるものの集合(全体集合のべき集合の要素で、個数2以上のものの集合)

不可算名詞には、単数・複数の区別がないのであるが、それは次のような理由による。まず、具象名詞については、全体集合に属する要素である個体の境界が不分明であるために、個数を認定することが不可能である。次に、抽象名詞については、全体集合そのものの要素である事態を決定することが困難であるため、全体集合と部分集合の境界が不分明である。したがって、例えば全体集合である COURAGE の部分集合が何であるかが確定できてはじめて COURAGE, courage- \emptyset , courage-s の区別を行うことができるのだから、それが不可能なのであればこれらの区別をすることも同様に不可能になる。(10)

3. 名詞の定と不定

定と不定の性質を明らかにするために、まず簡単な例を見てみることにしよう。

- (11) ①J'ai vu une fille. ②La fille portait un pull.

私はある女の子に会った。 その女の子はセーターを着ていた。

まず、①が使用される状況というものを規定しておく。状況とは、一般に、ある文が使用される時区間において存在する事態の集合の集合として

定義される。したがって、①における状況としては、「私がある女の子に会った」という事態以外には、特に個別的なものは存在しない。言い換えれば、この事態以外は、世界を構成する事態全体である。したがって、fille に関して言えば、「FILLE が存在する」という事態が状況中に存在することになる。

記述の利便のために、①の意味を次のように表示する。

(12) VOIR | su=loc, ob=fille_i, I<s |

VOIR |...| は、動詞 voir の意味する事態全体が成立することを表す。⁽¹¹⁾ su は「主体」、ob は「対象」という意味役割を表す。fille_i は、集合 FILLE に属する任意の、個数 1 の要素を表す。I は事態の成立する時間区間を、s は発話時点を表し、I<s は、I が s より「前」であることを意味する。

「FILLE が存在する」は、EX | FILLE | と表示する。

さて、この fille_i を fille_j (j≠i) に交換したとする。その場合、i は任意であったから、次の (13) が成立したとしても、(12) と矛盾することはない。

(13) VOIR | su=loc, ob=fille_j, I<s |

また、EX | FILLE | は、EX | fille_j | をも意味するから、この事態にも矛盾することはない。ゆえに、fille_i の fille_j への交換によって、状況と矛盾する事態は生じない。

ところが、②における状況は、①の場合とは異なる。なぜなら、状況中に個別的な事態である (12) が存在しているからである。ここで、②の意

味は次のように表示される。

(14) porter | su=filie_i, ob=pull_m, I<s |

porter | ... | は、動詞 porter が意味する事態の部分が成立することを表す。この fille_i は、(12) における fille_i と同一の個体を指示する（以下、状況に含まれる事態中の名詞と、使用される文中にある同じ名詞につけられた同一の添字は、同一の個体を指示するものとする）。

さて、fille_i を fille_j (j≠i) に交換したとする。この場合、次の (15) が成立したとすると、状況に矛盾することになる。

(15) porter | su=filie_j, ob=pull_m, I<s |

なぜならば、このとき状況中に存在する事態は (12) であって、(16) ではないからである。

(16) VOIR | su=loc, ob=filie_j, I<s |

以上のことは、名詞句の指示する対象が個数 2 以上の集合である場合にも同様に適用することができる。したがって、名詞句の定・不定は、次のような性質であると定義される。

- 定：名詞句の指示する集合を、その集合が属する全体集合の、他の任意の部分集合に交換した場合に、状況と矛盾する事態が生じる
 不定：名詞句の指示する集合を、その集合が属する全体集合の、他の任意の部分集合に交換した場合に、状況と矛盾する事態が生じない

ただし、lune 〈月〉, soleil 〈太陽〉などの名詞については、これらの指示する集合に属する要素の個数が 1 であって、この集合内部での他の要

素との交換が成立しない。この場合は、全体集合が「世界における個体の集合の集合」であると見なすことにする。このとき、この全体集合の任意の要素と、LUNE, SOLEIL に属する要素とを交換すると、状況に矛盾する事態が生じることは自明である。

次節の 4. では、この定義が、冠詞を伴う名詞句の意味を適切に説明することができるかを具体的に考察する。考察の対象とするのは、次の 3 つの場合である。

- a. 状況中にすでに個体が存在している場合
- b. 名詞句が、関係節・前置詞句・名詞節によって修飾されている場合
- c. 名詞句が、「すべての～」を意味する、いわゆる「総称的な」用法の場合

4. 名詞句の意味と冠詞

4. 1. 状況中にすでに個体が存在している場合

次のような状況があるとする。

(17) EX | fenêtres_i |

つまり、複数の窓が実際に存在している状況である。この状況で、「窓を開けろ」という意味の命令文を使用したとしよう。命令文の意味表示を、一般に (18) のように表示する。

(18) loc ORDONNE P

すると、命令文「窓を開けろ」の意味は、例えば (19) のように表示される。

(19) loc ORDONNE P & P= | sub=int, ob=fenêtres_m, I>s |
 (int=interlocuteur <聞き手>)

(17) と (19) で、 $m=i$ とする。このとき、(19) において fenêtres_m を fenêtres_n ($m \neq n$) に交換したとする。しかし、EX | fenêtres_n | という事態は状況中に存在しないから、この交換は状況に矛盾する事態を生じさせる。したがって、 $m=i$ ならば、(19) における fenêtres_m は定である。このことから、(19) の意味表示に対応するフランス語の文は、命令文を使用するならば、次のようになる。

(20) Ouvre les fenêtrés.

実際 (20) は、状況中 (例えばある部屋) に存在する「すべての」窓を開けろという意味を表示する。

同じ状況において、(21) を使用したとする。

(21) Ouvre des fenêtrés.

この文が適切に使用されるためには、状況中に存在する窓の「一部」を開けろという意味でなければならない。このことは次のようにして説明される。

(21) の意味表示は、(19) と同じでよい。ここで $m=i$ とすると、上に述べた理由で fenêtrés は定となるので、不定冠詞を用いた (21) は不適切となる。

次に $m \neq i$ とする。このとき、fenêtrés_i に対応する集合 I と fenêtrés_m に対応する集合 M との関係は、(a) $I \subset M$ と (b) $I \supset M$ のいずれかである。

(a) $I \subset M$ のとき

M の要素であって、しかも I の要素ではない集合 $fen\hat{e}tres_r$ が少なくとも 1 個存在する。⁽¹²⁾ このとき、状況中に $EX | fen\hat{e}tres_r |$ という事態は存在しないので、 $fen\hat{e}tres_m$ を $fen\hat{e}tres_r$ に交換すると、状況に矛盾した事態が生じることになる。ゆえに、 $fen\hat{e}tres_m$ は定となるので、不定冠詞を使用することはできない（ただしこの場合、定冠詞を名詞句に付けるとすれば、 M 自身が全体集合とならなければならない。つまり、世界の窓をすべて開けろと命令しているような場合である）。

(b) $I \supset M$ のとき

i. I が状況中におけるすべての窓であるから、これを全体集合とする。このとき、 I の要素であって M 自身ではない任意の集合 $fen\hat{e}tres_t$ と $fen\hat{e}tres_m (= M)$ を交換したとしても、 $fen\hat{e}tres_t$ は必ず I に含まれているから、 $EX | fen\hat{e}tres_t |$ が成立する。したがって、この交換は状況に矛盾する事態を生じさせない。ゆえに、 $fen\hat{e}tres_m$ は不定であり、これを表示する名詞句は複数不定冠詞 *des* を伴う。

ii. 全体集合を *FENETRE* とする。 $I \subset FENETRE$ だから、*FENETRE* に含まれ、かつ I に含まれない集合 $fen\hat{e}tres_d$ が存在する。 $fen\hat{e}tres_m$ と $fen\hat{e}tres_d$ を交換したとすると、 $EX | fen\hat{e}tres_d |$ となるが、これは明らかに状況に矛盾する事態である。したがってこの場合、 $fen\hat{e}tres_m$ は定となる。これは例えば、部屋の中の窓の一部を指して、その窓を全部開けろと命令しているような場合に相当する。

結局、 $fen\hat{e}tres_m$ が不定でありうるのは、(b) i の場合だけであり、これは、状況中にある窓の一部を開けろと命令している場合に他ならな

い。

4. 2. 関係節・前置詞句・名詞節によって修飾されている名詞を主辞とする名詞句

「名詞+関係節/前置詞句/名詞節」という構造の名詞句の意味は、これらの修飾句が指示する集合と名詞の指示する集合の共通部分としてとらえられる。この種の名詞句の定・不定を考える場合には、主辞である名詞だけに焦点を絞ることは当然不適當で、この名詞句全体の意味を考慮する必要がある。すなわち、「名詞+修飾句」という構造の名詞句の全体集合とは、その名詞句の指示する集合なのであって、修飾句を除いた名詞だけの全体集合ではないということである。

4. 2. 1. 関係節によって修飾される名詞を主辞とする名詞句

この種の名詞句に関しては、定である場合と不定である場合の2通りがありうる。

(22) La maison que j'habite me plaît.

私は住んでいる家が気に入っている。

maison que j'habite という名詞句は、「話し手が住んでいるものの集合」と集合 MAISON の共通部分の部分集合で、個数が1のものを指示している。この共通部分が、maison que j'habite が表示する個体の集合(これをCとする)となる。Cは次のように表示される。

(23) $C: \text{MAISON} \cap \lambda x (\text{habiter} \mid \text{sub}=\text{loc}, \text{ob}=x, \text{I}\supset\text{s} \mid)$

(22) における状況は、(22) の表示する事態と $\text{EX} \mid C \mid$ であって、C

が (22) における名詞句 *maison que j'habite* の全体集合である。(22) の意味は、次のように表示される。

(24) $\text{plaire} \mid \text{sub} = c_i \in C, \text{ob} = \text{loc}, I \supset s \mid$
 (c_i は、全体集合 C の任意の要素)

ここで、(24) の c_i を c_j ($j \neq i$) に交換することはできない。なぜならば、1人の人間が発話時点で住むことのできる *maison* の個数は1個に限られていることから、 C に属する要素の個数は1になるからである。したがって、*maison que j'habite* は定である。実際、(22) において定冠詞を不定冠詞に置き換えた文 (25) は不適格である。

(25) * Une maison que j'habite me plaît.

それでは次の文を見てみよう。

(26) J'ai pris un train qui s'arrête à Nancy.

私はナンシーに止まる列車に乗った。

train qui s'arrête à Nancy が指示する集合 C は、「列車の集合」と「ナンシーに止まるものの集合」の共通部分であり、(27) のように表示される。

(27) $C: \text{TRAIN} \cap \lambda x (s'arrêter \mid su = x, pl = \text{Nancy}, I = \infty)$

(pl は「場所」を、 $I = \infty$ は、事態があらゆる時点において成立することを表す)

(26) における状況は、(26) が表示する事態と $EX \mid C \mid$ である。 C の任意の要素を c_i とすると、(26) の意味は、次のように表示される。

(28) PRENDRE | su=loc, ob=c_i, I<S |

(28) で $c_i \in C$ を c_j ($j \neq i$) $\in C$ に交換することは可能である。なぜならば、「ナンシーに止まる列車」の個数は2以上であるからであり⁽¹³⁾、したがって、この交換によって生じる事態は、状況に矛盾することはない。ゆえに、train qui s'arrête à Nancy は不定である。

さらに、次の文を見てみよう。

(29) Anne a mangé les pommes qu'elle avait achetées.

アンヌは自分が買ってきたケーキを食べた。

pomme qu'elle avait achetée の指示する集合 C は次のように表示され、

(29) における状況は、(29) の表示する事態と $EX | C |$ である。

(30) $C: POMME \cap \lambda x (ACHETER | su=Anne, ob=x, I < r < s)$

(r は、発話時点よりも前の時区間で、主節によって表示される事態が生じた時区間を指す)

C のべき集合の要素で、個数2以上のものを c'_i で表すことにすると、

(29) の意味は、次のように表示される。

(31) MANGER | su=Anne, ob=c'_i, I < s |

ここで、 $c'_i \neq C$ 、つまり c'_i が C の真部分集合であるならば、 c'_j ($j \neq i$) $\subset C$ または c_k ($\subset C$ 、かつ c'_i の要素ではない) が少なくとも1つ存在する。このとき、 c'_i を c'_j または c_k に交換したとしても、状況に矛盾する事態は生じない。したがって、この場合には pommes qu'elle avait achetées は不定となる。

一方、 $c_i=C$ 、つまり c_i が C に等しいならば、 C に属する c_i 以外の要素は存在しないことになり、上のような交換は不可能になる。この場合には、したがって、*pommes qu'elle avait achetées* は定となる。定冠詞が用いられている (29) の表示する意味は、この場合であって、言い換えれば、アンヌは自分の買ってきたリンゴを「全部」食べたという意味を表す。

以上の考察からも分かるように、関係節を含む構造の名詞句については、その名詞句が単数形であれば、状況中に特定の個体集合が存在しない場合には、それが指示する集合の個数が 1 であれば定であるし、個数が 2 以上であれば不定になる。

同じ状況で名詞句が複数形であれば、定でも不定でもありうるが、定である場合には、その名詞句が指示する集合の全体を指すし、不定であれば、その名詞句が指示する集合の部分指す。

4. 2. 2. 前置詞句によって修飾されている名詞を主辞とする名詞句

「名詞+前置詞句」という構造をもつ名詞句の意味は、名詞によって指示される集合と前置詞句によって指示される集合の共通部分としてとらえられる。

(32) Je vois un oiseau sur le toit d'une maison.

ある家の屋根に鳥がとまっているのが見える。

d'une maison という前置詞句が表示する集合は、「ある家に属するものの集合」である。これを $\lambda x (AP \mid su=x, \text{ben}=\text{maison}_i)$ で表す。⁽¹⁴⁾ このとき、*toit d'une maison* の意味は、次のように表示される。

(33) $\text{TOIT} \cap \lambda x (AP \mid su=x, \text{ben}=\text{maison}_i \mid)$

(33) によって表示される集合を C とすると, (32) における状況は, この文の表示する事態と $EX | C |$ である。

(32) の意味は (34) のように表示される。

(34) $\text{voir} | \text{su}=\text{loc}, \text{ob}=\text{ci}, I \supset \text{s} |$

ある任意の 1 個の家に属する屋根の個数は 1 だから, C の個数は 1 である。したがって, c_i 以外で C に属する c_j ($j \neq i$) と c_i とを交換することはできない。ゆえに, 名詞句 *toit d'une maison* は定である。(32) で, 定冠詞を不定冠詞に置き換えた文は不適格となる。

(35) * *Je vois un oiseau sur un toit d'une maison.*

名詞句が複数形の場合を見てみよう。

(36) a. *Michel a acheté des tableaux de Picasso.*

b. *Michel a acheté les tableaux de Picasso.*

ミシェルはピカソの絵を買った。

tableau de Picasso の意味は次のように表示される。

(37) $\text{TABLEAU} \cap \lambda x (\text{AP} | \text{su}=x, \text{ben}=\text{Picasso} |)$

(37) によって表示される集合を C とすると, (36) の状況は, この文の表示する事態と $EX | C |$ である。ピカソに属する個体の中に, 絵であるものは多数存在するから, C の要素の個数は 2 以上である。したがって, C のべき集合の任意の要素 c'_i を c'_j ($j \neq i$) に交換することができる。

関係節を含む名詞句の (29) の例で考察したように, 複数形名詞句 *tableaux de Picasso* が定であるのは, それが指示する集合が C に等しい

場合であり、不定であるのは、それが指示する集合がCの真部分集合である場合である。ゆえに、(36 a)は、ミシェルがピカソの描いた絵の「部分」を買ったことを意味し、(36 b)は、ミシェルがピカソが描いた絵の「全部」を買ったことを意味する。

4. 2. 3. 名詞節によって修飾された名詞を主辞とする名詞句

(38) L'idée que Dieu existe est fausse.

神が存在するという考えは嘘だ。

IDEE は、"su_a pense que P_a", "su_b pense que P_b" ……という事態の集合であり、que 以下の名詞節は、P_iに対応している。したがって、idée que Dieu existe という名詞句の指示する集合は、次のように表示される。

(39) IDEE \cap λP (penser | su=su_i, ob=P, I=I_j |)

P: EXISTER | su=Dieu, I= ∞ |

(39) によって表示される集合をCとし、その要素をc_iで表すと、(38)の意味は、次のように表示される。

(40) ETRE FAUX | su=c_i, I= ∞ |

(39)の表示する集合Cについて、Pは1個の事態だから、Cの個数も1となる。(38)における状況は、この文の表示する事態とEX | C |である。Cの個数が1である以上、Cの任意の要素を、それ以外の任意の要素に交換することは不可能になる。したがって、c_i=Cに対応する名詞句 idée que Dieu existe は定となる。

4. 3. 総称的な意味を表示する名詞句

名詞句が総称の意味を表す文としては、次のものがある。

(41) L'homme est mortel.

(42) Les hommes sont mortels.

(43) Un homme est mortel.

人は死ぬ。

それぞれの文について、名詞句の意味を考察していくことにする。

4. 3. 1. 定冠詞+名詞句の単数形

(41) の名詞 *homme* に関しては、形態論的には、2通りの解釈がありうる。⁽¹⁵⁾ 1つは、単数形態素のついていない *homme* であり、もう1つは、単数形態素のついた *homme-φ* である。

homme という解釈を選ぶならば、これは $homme_i$ を要素とする全体集合 *HOMME* を指示する。したがって、(41) の意味は次のように表示される。

(44) *ETRE MORTEL* | $su = HOMME, I = \infty$ |

ここで、(44) の主体が $homme_i$ ではなく *HOMME* であることに注意しよう。*HOMME* は、より上位の集合である個体の集合（これを *E* で表し、その要素を *e* で表す）の1要素であり、したがって、*HOMME* を含む全体集合は世界における個体の集合の集合全体となる。⁽¹⁶⁾

さて、*HOMME* を含む全体集合の *HOMME* 以外の任意の要素を e_i とする。*HOMME* を e_i に交換すると、 $EX | e_i |$ という事態が生じるが、この事態は状況に矛盾することはない。なぜならば、(41) における状況

は、 $EX | E |$ (すなわち、世界を構成するすべての個体集合の集合がある、という事態) および (44) の表示する事態であって、 $EX | E |$ ならば $EX | e_i |$ が成立するのは当然だからである。

しかし、 e_i は任意であるから、例えばそれが DIEU 〈神〉や ETOILE 〈星〉のように mortel だとは見なされないものであれば、それを主体とする文 (45) は、状況に矛盾することになる。

(45) ETRE MORTEL | $su=e_i, I=\infty$ |

そもそも形容詞 (A とする) とは、世界を構成する個体や事態の集合を、原則としては3つに区分して (A であるもの、A でないもの、そのどちらでもないもの)、ある集合を A という区分に属せしめるという機能をもつものであるから⁽¹⁷⁾、(45) のように述語の主要成分が形容詞であるような文が使用されるためには、その前提として、その形容詞が指示する集合に属さない個体・事態の集合が存在していなければならない。

ゆえに、HOMME は定である。そして、この集合には個体 homme のすべてが要素として含まれているから、(41) は、「すべての人間は死ぬ」という意味を表すことができる。

なお、1個の事態の主体は、1個の個体または事態であると見なされる。例えば、次の (46) は、「Alain が来た」という事態と「Jacques が来た」という事態の複合したものであると考えることができる。

(46) Alain et Jacques sont venus.

アランとジャックが来た。

したがって、(46) の意味表示は、(47) のようになる。

(47) VENIR | su=Alain, $I < s$ | & VENIR | su=Jacques, $I < s$ |

この方法をとるならば, (44) は, さらに (48) のように分析される。

(48) ETRE MORTEL | su=homme_a, $I = \infty$ | & ETRE MORTEL |
 su=homme_b, $I = \infty$ | & ... & ETRE MORTEL | su=homme_i,
 $I = \infty$ | & ... = \cup ETRE MORTEL | su=homme_i, $I = \infty$ | =
 ETRE MORTEL | su=HOMME, $I = \infty$ |

もし, (41) における状況として EX | homme_i | があるならば, (41) が「ある人間は死ぬ」という意味を表すことは, 4.1. で述べた通りである。

4. 3. 2. 定冠詞+名詞の複数形

(42) の意味は, hommes の定・不定の表示を除けば, 次のように表示される。

(49) ETRE MORTEL | su=hommes_i, $I = \infty$ |

(42) における状況中には, 特定の個体が存在していないので, hommes_i の全体集合としては HOMME を考えればよい。hommes_i はあくまでも HOMME の部分集合であるから, (41) の場合のように, 全体集合として個体の集合の集合を想定する必要はない。さて, hommes_i は HOMME のべき集合の要素で, 個数が 2 以上のものなのであるが, これを表示する名詞句 hommes の定・不定を決定するには, hommes_i が HOMME の真部分集合である場合と, hommes_i が HOMME に等しい場合の 2 通りを検討する必要がある。

(a) hommes_i が HOMME の真部分集合である場合

HOMME の部分集合であって hommes_i とは異なる hommes_j ($j \neq i$), もしくは hommes_i の要素ではない homme_k が存在する。したがって, (49) において, hommes_i と hommes_j または homme_k を交換することができる。このとき成立する事態は, $\text{EX} \mid \text{hommes}_j \mid$ または $\text{EX} \mid \text{homme}_k \mid$ を含意するが, これは当然状況と矛盾することはないし, hommes_j や homme_k が述語 *être mortel* の主体となる事態が, 状況と矛盾する必然性はない。

ゆえに, この場合は名詞句 *hommes* は不定となり, このような不定の *hommes* を含む次の文は, 「人間の一部は死ぬ」という意味を表すことになる。

(50) Des hommes sont mortels.

(b) hommes_i が HOMME に等しい場合

HOMME の部分集合であって hommes_i とは異なる hommes_j ($j \neq i$), もしくは hommes_i の要素ではない homme_k は存在しない。したがって, (49) において, hommes_i の全体集合に属していて, hommes_i と交換することのできる要素はないことになる。このとき, hommes_i は定であって $\text{hommes}_i = \text{HOMME} = \bigcup \text{homme}_i$ であるから, これに対応する名詞句 *hommes* を含む文 (42) は, 「すべての人間は死ぬ」という意味を表すことになる。

ところで, フランス語と同様に定冠詞と不定冠詞をもつ言語である英語の次の文は, 「すべての人間は死ぬ」という意味を表すことができない。

(51) The men are mortal.

一方、形態的にはフランス語の(50)に対応する次の文ならば、「すべての人間は死ぬ」という意味を表すことができる。

(52) Men are mortal.

この理由については、英語の冠詞や名詞句の意味を考える必要があるが、恐らく、英語には、個体や事態の集合の全体を指示する名詞句については、たとえそれが定であっても冠詞を付けないという傾向が強いからであろうと思われる。

(53) a. I love coffee.

私はコーヒーが好きだ。

b. Peace should be looked for.

平和は求められるべきだ。

固有名詞も単一の個体を指示するのであるから、定であるのだが、英語の場合はフランス語に比べて定冠詞を伴う例が極めて限定されている。これも、英語における同様の傾向を反映する現象の1つであると見なすことができるだろう。したがって、(51)のように複数形名詞に定冠詞が付いている名詞句は、無冠詞の複数形名詞と意味的に差異を生じさせるために、全体集合の真部分集合であって定であるものを指示するようになっているものと考えられる。

4. 3. 3. 不定冠詞+名詞の単数形

(43) の意味は、homme_i が不定であることの表示を除けば、次のよう

に表示される。

$$(54) \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_i, I=\infty \mid$$

ここで、 $I=\infty$ であるということは、事態が任意の時区間で成立するという意味であるから、(54)は次の事態と同値である。

$$(55) \bigcup_k \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_i, I=i_k \mid$$

さらに、 homme_i が不定であるということは、HOMMEに属する「任意の」 homme_j ($j \neq i$) と homme_i を交換しても状況に矛盾しないという性質であったから、(55)の表示に、 homme_i が不定であることを加えて表示すると、(56)のようになる。

$$(56) \bigcup_i \bigcup_k \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_i, I=i_k \mid \\ = \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_a, \\ I=i_a \mid \& \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_b, I=i_b \mid \& \dots \& \\ \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_n, I=i_n \mid \& \dots$$

また、être mortelという述語を含む文については、次の性質がある。

$$(57) \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_i, I=i_k \mid \\ \equiv \text{ETRE MORTEL} \mid \text{su}=\text{homme}_i, I=\infty \mid$$

すなわち、ある任意の人間がある時区間において、死ぬという性質をもっているということは、同じ人間がすべての時区間において、死ぬという性質をもっていることに等しいということである。⁽¹⁸⁾ (57)を適用するならば、(56)は(58)と同値になる。

- (58) \cup ETRE MORTEL | su=homme_i, I= ∞ |
 = ETRE MORTEL | su=homme_a, I= ∞ |
 & ETRE MORTEL | su=homme_b, I= ∞ |
 & ... & ETRE MORTEL | su=homme_n, I= ∞ | & ...

(58) は (48) と同じであって、やはり「すべての人間は死ぬ」という意味を表示している。

5. 結 論

名詞句の定・不定を表示するのが冠詞であり、定・不定は、名詞句の意味と状況の性質によって主として決定される。また、総称的な意味を表す名詞句を論じる時に見たように、述語の性質が冠詞を含む文の意味に関与することもある。このように、いわゆる機能語である冠詞の意味の記述と説明には、文を構成する各成分の意味と文の使用される状況を考慮する必要がある。したがって、冠詞だけでなく、機能語（機能形態素）一般の意味の記述と説明を、できるだけ完全な形で矛盾なく行うためには、状況と文の意味が十分に解明されていなければならないということである。

状況と文の意味に関する研究は、昨今ようやく本格的な取り組みがなされ始めたばかりである。したがって本稿も、その段階に対応する不完全な意味記述の道具立てで冠詞の意味を論じざるを得なかった。冠詞の完全な意味記述は、今後の文の意味論の発展がどのような形でなされるかに大いに依存する。近い将来、有効な意味記述の方法が提出されれば、さらに完全に近い冠詞の記述も可能になることと確信する。

本稿では、冠詞を伴わない名詞句の意味や、不定冠詞と部分冠詞の交替などの、フランス語の名詞句の意味論において論じるべき重要な問題を、

取り扱うことができなかった。いずれ稿を改めて論じたいと思っている。

注

- (1) 名詞句の指示する対象，すなわち名詞句の意味は，個体または事態の集合であるが，このことについては，1. でより詳しく論じる。
- (2) 形式的には，部分冠詞は「de+定冠詞」という構造をもっているから，部分冠詞を定冠詞の下位範疇と見なす考え方もあるようだし（松原1949），通時的には部分冠詞と定冠詞に意味的關係が存在したものと推測される。しかし，少なくとも共時的には，例えば *le poisson* と *du poisson* の間に定と不定の意味的対立があることは確かだから，部分冠詞を不定冠詞の下位範疇と判断するほうが合理的である。
- (3) ただし，Guillaume は，不定である性質のほうについては，具体的な性格をもつ個体を指示する機能をもつとしている。
- (4) Van de Velde (1994) は，次の文の *un arbre* を，部分でもなければ全体でもないとしている。

Un arbre a été abattu par la foudre.

ある木が雷に打たれた。

その理由は，不定冠詞の機能が，あるものの存在を仮定するだけで，実際に存在することを意味するものではないという主張に根拠を置くのであるが，これは，言語の表示する事態を現実世界における事態との関連においてのみ解釈しようとする立場の反映である。実際には，言語の表示する事態が現実世界の事態と対応する場合とそうでない場合があり，したがって言語と現実の乖離が原理的に許されるのであるから，Van de Velde の主張は，言語に対する余りに一面的な観点に立脚するものだと考えざるをえない。

- (5) 例えば，川や海に存在する *eau* ならば，それは常に流動の状態にあるから，どこに個体としての境界を設定するかは，話者の恣意的判断に委ねられることになり，このことは，ラングのレベルにおいて *eau* の個体境界は存在しないということに等しい。
- (6) *courage* についても，「消防士が燃えているビルの中に飛び込んで人を

助ける」という事態ならば、これを「勇気」に属する要素と考える話者が大多数だろうが、「誰かが大雨の後で流量が増している川に飛び込んで泳ぐ」という事態を「勇気」に属する要素と見なす話者は大多数とはとても言えないだろう。

- (7) {-s} は、音声形式においては音形を与えられないのが普通であるが、後続する形態素によっては、リエゾンによって、/z/という音形を与えられることもあるのだから、この形態素を設定することには意味がある。
- (8) したがって、意味を集合と見なさない意味論であれば、名詞の単数形に2つの形式を対応させる必要がなくなる場合もあるだろう。
- (9) 全体集合のべき集合の部分集合には、それが真部分集合でなければ、全体集合自身も含まれる。全体集合に属する要素の個数は、通常は2以上であるから、全体集合は複数形で表すことになるはずである。この問題については、4.3.で論じる。
- (10) 不可算名詞に属する抽象名詞の複数形が不可能であることについては、これだけの説明では不十分である。この問題については、いずれ稿を改めて論じる。
- (11) 事態の成立は、その全体が成立する場合と、その部分が成立する場合の2種類に区分される。この区別が「アスペクト内容」の区別である。アスペクト内容を表示するための形式が「アスペクト形式」であり、事態の全体が成立することを表示する形式が「全体相形式」であり、事態の部分が成立することを表示する形式が「部分相形式」である(町田1993)。
- (12) 実際は、Mの要素であってIの要素ではない個体 $\text{fen\^e}tre_t$ が存在する場合もありうる。
- (13) ナンシーはロレーヌ地方の主要都市であって、この都市に止まる列車はたくさんある。
- (14) APはAPPARTENIR〈属する〉、benはbénéficiaire〈受益者〉の略。
- (15) この点については、冒頭で触れただけで、これまでの論では特に問題にしてこなかったが、その理由は、取り上げた例に含まれる名詞のいずれもが、単数形態素が後置された形式であったからである。
- (16) HOMMEの全体集合としては、個体の集合の集合より下位に位置するMAMMIFERE〈ほ乳類〉やANIMAL〈動物〉なども考えられる。し

かし、ある任意の名詞の全体集合がどれであるかは、言語によって異なることが十分にありうる。しかし、本稿で問題にしている定・不定の問題は、それを表示する形態素がある場合であれ、そうでない場合であれ、言語普遍的に記述可能な性質であるから、ある名詞の指示する集合の全体集合としては、より普遍的な「個体の集合の集合」および「事態の集合の集合」を設定するのが適当であると思われる。

- (17) 形容詞の意味は複雑で、この記述だけでは十分ではないが、これを詳しく論じる余裕はないので、問題にしている論点に必要な部分だけを述べておく。
- (18) 形容詞が述語を構成している場合には、この性質が当てはまることが多い。例えば、「太郎は誠実だ」という事態がある時区間において成立しているならば、「太郎はいつでも誠実だ」という事態が成立するし、この逆も成立する。

参考文献

- 朝倉季雄. 1955. 『フランス文法事典』白水社.
- Galmiche, Michel. 1989. "A propos de la définitude". *Langages* 94.
- Grevisse, M. 1986¹². *Le bon usage*. Paris-Gembloux: Duculot.
- Guillaume, Gustave. 1975. *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*. Librairie A. -G. Paris: Nizet.
- 一川周史. 1988. 『冠詞抜きでフランス語はわからない』駿河台出版社.
- Kleiber, G. 1989. "«Le» générique: un massif?". *Langages* 94.
- Montague, Richard. 1974. *Formal Philosophy*. New Haven: Yale Univ. Pr.
- 町田健. 1993. 「時の分類」『言語』22-10.
- 町田健. 1994. 「言語記号の恣意性の必然性について」『東京大学言語学論集』14.
- Russel, Bertrand. 1905. "On denoting". *Mind* XIV.
- 佐藤房吉, 大木健, 佐藤正明. 1991. 『詳解フランス文典』駿河台出版社.
- Van de Velde, Danièle. 1994. "Le défini et l'indéfini". *Le Français Moderne* LXII-1.